



TITLE:

# コロニアルから鏡像へ--地方から見たインドネシア・フットボール史序説

AUTHOR(S):

楠田, 健太

---

CITATION:

楠田, 健太. コロニアルから鏡像へ--地方から見たインドネシア・フットボール史序説. アジア・アフリカ地域研究 2006, 6(1): 44-76

ISSUE DATE:

2006-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/80067>

RIGHT:

## コロニアルから鏡像へ

— 地方から見たインドネシア・フットボール史序説 —

楠 田 健 太\*

### From Colonial to Reflection: A Local History of Indonesian Football

KUSUDA Kenta\*

Indonesia was once one of the leading football countries in Asia. Even though the international status of Indonesian football has long been attenuated, football is still the most popular sport in the country. This article is an attempt to describe the relationship between society and sport in Indonesia through focusing on a local football club.

PSM is a football club established in 1915 in Makassar, the provincial capital of South Sulawesi. At first, the club was given the Dutch name of MVB (Makassar Voetbal Bond). During the Japanese occupation, it was given a new Indonesian name, PSM (Persatuan Sepakbola Makassar), by which it has been known ever since.

The 1950s and mid-60s were the golden era of PSM, starring Ramang—considered to be the greatest Indonesian footballer. South Sulawesi was at that time the ground for the Kahar Muzakkar rebellion against the central government. This period is known as the era of *Fanatisme Daerah* (regional fanaticism). PSM served as a powerful tool to counterbalance outsiders, mainly from Jawa.

In the late 60s the rebellion ended, Suharto's New Order regime began, and South Sulawesi found itself more integrated into the central government than it had previously been. Concurrently, PSM's achievements gradually declined. Ironically, however, PSM became a symbol of Makassar, receiving support from the mayor of Makassar and a local entrepreneur. Consequentially, PSM was significant for internal Makassarese society rather than broader society outside of the world of Makassar.

Within these contexts, although it was originally born as an offshoot of the Dutch East Indies, PSM gives a 'visualization' of the characteristics of Makassar of the times. Football, in this sense, offers us an optimal chance to examine related issues such as ethnicity, regional history, social integration, and local and central politics.

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2005 年 9 月 5 日受付, 2006 年 2 月 21 日受理

## はじめに—インドネシアサッカーと地域研究の射程

19 世紀イギリスで誕生した「近代スポーツ」<sup>1)</sup> が、巨大な文化装置として世界を覆うようになって久しい。オリンピックや各種世界大会をヒエラルキーの頂点とする、スポーツに対するグローバルな価値観の浸透が進む一方で、我々はスポーツが織りなす豊潤な地域的差異にも関心を払わねばならない。

数多のスポーツ競技のなかで、現在世界で最も高い人気を誇るのがサッカーである。FIFA (Fédération Internationale de Football Association, 国際サッカー連盟) には国連を超える国と地域が加盟し、<sup>2)</sup> その最大のイベントであるワールドカップの総視聴者数は、オリンピックのそれをもはるかに凌ぐ。本来、世界大会ほどの意味しかもたないワールドカップという言葉が、その競技種目をいわずして話が通じてしまうのもサッカーのみであろう。

さてインドネシアのサッカー、と聞いてどのような印象をもたれるだろうか。国際舞台においてなかなか芳しい結果を残せていない昨今、おそらく大抵の人々にとって、何のイメージも喚起されないのではないかと。しかし、一度インドネシアを訪れた者なら納得していただけたと思うが、紛れもなくインドネシアは「サッカー大国」であり、人々のサッカーに対する執心ぶりたるや今もって日本の比でない。路上や空き地では連日子供から大人までボールを追う姿を見ることができ、プロの試合になれば（しばしアマチュアの草サッカー試合でさえ）熱狂的な観衆によってスタジアムは超満員となる。

バドミントンと並ぶインドネシアの国民的スポーツ。都市や農村部はおろか、最東部のイリアン・ジャヤ州の秘境部でさえ圧倒的な人気を博している（後略）。

『インドネシアの事典』における「サッカー」の項目からの引用であるが〔大川 1991: 186〕、事実そのとおりなのである。当時オランダ領東インドとよばれたその領域内に初めてサッカーが伝えられたのは、現存する記録を参照するかぎり 1893 年、宗主国オランダによってであった〔PSSI 1990: 28〕。以来サッカーはインドネシアにおいて急速な発展を遂げ、1938

---

1) 古来より身体を媒介とする儀礼や遊戯は例外なく世界中で見られ、今日におけるスポーツ的な要素を含むものも多々あるが、本稿において「スポーツ」という用語は、ドイツの歴史社会学者ノルベルト・エリアスの定式化した「近代スポーツ」と同義と見なして差し支えない。人間のさまざまな行動様式の「文明化の過程」(*civilizing process*) の理論を提出したエリアスの議論によれば、近代スポーツの誕生と議会制度の発生の過程は、同時代的かつ同質的な関係にあるという。すなわち、政治が暴力（革命）によらず議会制度によって遂行されるように、スポーツは「非暴力の競争」モデルとして捉えられる〔エリアス・ダニング 1995〕。同様に、本稿における「サッカー」は、世界のさまざまな地域に存在する「民俗フットボール」は含まず、イギリスに起源をもち、1863 年にルールが採択された、いわゆる近代スポーツとしてのフットボール—サッカーを指すものとする。

2) FIFA に加盟する国および地域は 205、国連のそれは 191 である（2005 年 8 月現在）。

年にはアジア地域から最初のワールドカップ出場国となった。その後サッカーというスポーツの一競技は、インドネシアという国家としての成立や近代化と不可分な歴史をたどることになるが、その過程は「世界最大の群島国家」にあって地域的にきわめて多様な性質を帯びている。

本稿において筆者は、インドネシアにおける地域社会とスポーツの関わりを考察する 1 つの事例として、PSM マカッサル<sup>3)</sup> という地方のサッカークラブを取り上げる。スラウェシ島、南スラウェシ州の州都であるマカッサルに本拠を置く PSM の設立は、実にオランダ植民地時代の 1915 年に遡る。表 1 は、インドネシアのプロサッカーリーグ、リガ・インドネシア (Liga Indonesia) 2005 年度シーズン (Ligina XI) のトップリーグに参加した全 28 チームのホームタウンと設立年を記したものである。PSM はこれらのなかでも群を抜いて長い歴史をもっていることが分かる。国内では人気、実力ともにトップクラスのチームとして認識されており、“Juku Eja” (赤き魚)<sup>4)</sup> もしくは “Ayam Jantan Dari Timur” (東方の雄鶏)<sup>5)</sup> の愛称で知られる。本稿は、PSM の設立から 1990 年代半ばまでの約 80 年を考察の対象とし、マカッサルの社会史を、マカッサルの人々と久しく身近に繋がってきた PSM を媒介として構築する試みである。

南米やヨーロッパを中心に、サッカーをナショナリズムと結びつけたり、チームを取り巻くサポーターやフーリガニズムなどについて論じた研究はすでに蓄積がある。<sup>6)</sup> しかし東南アジアにおいてそうしたスポーツについての研究はいまだ少ない。インドネシアにおけるサッカーの社会的・歴史的研究としては Colombijn と Palupi によるものがあげられる。前者は、筆者自身が「インドネシアサッカーの研究は依然空白であり、本稿がその最初の試みである」[Colombijn 2000: 172] と述べているとおり、インドネシアサッカーの包括的・概論的な導入として位置づけられる。後者については、*Sepak Bola di Jawa 1920–1942* (『ジャワのサッカー 1920–1942』) というタイトルのとおり、地域的にも時代的にも限られた事実の羅列レベルにとどまっている。したがってサッカーを切り口に、インドネシアの一地方都市をフィールドと

3) PSM は Persatuan Sepakbola Makassar の略。Persatuan は「統一」「連盟」の意、Sepakbola はサッカーを指す。2001 年、2005 年にはインドネシアの代表として、アジア・チャンピオンズリーグの舞台でそれぞれ日本のジュビロ磐田、横浜 F・マリノスとも対戦している。

4) マカッサル語で、juku=魚、eja=赤。赤が PSM のチームカラーである。

5) インドネシア語で、ayam=鶏、jantan=雄々しい、dari=～から、timur=東。この呼称は元来、17 世紀、オランダ東インド会社からも勇名をもって知られた、賢侯スルタン・ハサヌディン (南スラウェシのゴワ王国 16 代王、1973 年には国家英雄に指定された) のものである。ここで PSM の選手たちは郷土の英雄になぞらえられる。

6) 代表的な作品としては、ブラジルの社会とサッカーとの関わりを、1970 年代に行ったフィールド調査をもとに詳細に記述したリーヴァー [1996] や、イギリスとフランスにおけるサッカーのサポーターの組織化と暴力について論じたミニョン [2002] などがある。

表 1 Ligina XI (2005 年) 全 28 チームのホームタウンと設立年

チーム	ホームタウン	設立年
PSM	マカッサル	1915
Persebaya	スラバヤ	1927
Persija	ジャカルタ	1928
PSMS	メダン	1930
PSIS	スマラン	1932
Persib	バンドウン	1933
Persipura	ジャヤブラ	1950
Persiba	バリックパパン	1950
Persik	クディリ	1950
Persita	タンゲラン	1953
Persema	マラン	1953
PSPS	プカンバル	1955
PSDS	デリスダン	1958
Persmin	ミナハサ	1960
Persijap	ジュバラ	1960
Persibom	ボラアンモンゴンドウ	1963
Persela	ラモンガン	1967
Deltras	シドアルジョ	1969
Persegi	ギアニャール	1970
PSS	ジョグジャカルタ	1976
Arema	マラン	1982
Persekabpas	パスルアン	1983
Petrokimia	グレシック	1986
PKS	チレゴン	1986
SP	パダン	1986
PKT	ボンタン	1987
Persikota	タンゲラン	1994
Sriwijaya	パレンバン	2004

各チームホームページ、パンフレットなどをもとに作成.

する本研究は、同国のスポーツ史研究、地域研究両面において先駆けをなすものである。

1990 年代、日本にもプロリーグができ、ワールドカップ出場も果たした。南米やヨーロッパで活躍する日本人選手も多い。2002 年にはワールドカップの開催国にもなった。現在日本サッカーが、アジアのなかで強豪の地位を占めているということに異論の余地はあるまい。そうしたなか、東南アジアの、インドネシアのサッカーに関心を払う人は少ない。しかしかつて、日本がどうしてもインドネシアに勝てなかった、胸を借りによく遠征に出かけていたという時期も確かに存在するのである。<sup>7)</sup> そのような歴史のなかに、今まで顧みられることのなかったさまざまな物語が埋もれているとしても不思議ではない。

## 1. 調査地の概要<sup>8)</sup>

PSM がホームタウンとするマカッサルは、古くから国際的な港市として発達した南スラウェシ州の州都であり、スラウェシ島南端部に位置する（図 1）。南スラウェシには主にブギス人、マカッサル人、トラジャ人、マンダル人という 4 つの民族が居住しており、マカッサルでは特にブギス人とマカッサル人の人口が卓越している。

インドネシアでは、首都ジャカルタを擁するジャワや国際的な観光地バリを含む、開発が進んだ西部地域に対して、スラウェシやイリアンを含む東部地域は、面積は広いが人口は少なく、いまだ低開発で遅れた地域、という文脈で語られることが多い。そのなかにあって南スラウェシ、特にマカッサルは例外的な位置を占めている。事実、西部に比べ東部の全体的な開発の遅れは否めないものの、東部のなかでマカッサルは群を抜いて先進的な都市である。現在 120 万を超える人口を抱え、東部インドネシアではもちろん随一の規模を誇る。

したがってマカッサルの人々の、国家やジャワに対する想いは複雑である。1950 年代南スラウェシで続いた大規模な地方反乱をジャワ人主体の中央政府軍に鎮圧されたことや、現在優秀な人材がジャカルタに流れていってしまうことなどを背景に、中央に対するコンプレックスがマカッサルの人々には抜きがたくある。一方で、マカッサルが古くから海上交通の要所であり、16 世紀にはすでに香料貿易の港市として国際的に有名であったこと、17 世紀から 18 世紀にかけて、ブギス人、マカッサル人が広範な東南アジア海域世界の制海権を掌握していたこと、そしてオランダ、日本の植民地行政の中心地として発展したことといった歴史的な経緯や、中央政界でも大きな権力を握るに至った M・ユスフ<sup>9)</sup> やハビビ<sup>10)</sup> といった突出的な一部

---

7) 公式戦で日本代表は 1934 年、1954 年、1961 年にインドネシア代表と対戦しているが、いずれも敗れている（スコアはそれぞれ 1-7, 3-5, 0-2）。練習試合では一方的な大敗を喫することもしばしばであったという。なお、日本代表がインドネシア代表から初勝利をあげるのは 1970 年のことである（スコアは 4-3）（JFA 日本サッカー協会ホームページ）。

8) 本稿の基礎となった調査は、マカッサルとジャカルタを中心に 2002 年 1 月～2 月と 2002 年 12 月～2003 年 11 月の延べ 12 ヶ月にわたって行った。2 度目の調査のさいには、インドネシア科学院 (Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia) より調査許可を取得した。調査で得られた資料は、書籍・雑誌・新聞などの文献資料はもちろん、関係者からの聞き取りや、地元紙を通じて募った一般の方々からの情報などであり、多くの人々の厚意と協力に負うものである。併せて感謝の意を記す。

9) Andi Mohamad Jusuf (1928-)。南スラウェシ州ボネ出身。ブギス人。1966 年スカルノ大統領を退陣へ導き、政治の実権をスハルトに移譲することとなった「3 月 11 日命令書」（スプル・スマル）を画策した 3 人の将軍の 1 人。元国軍司令官・国防治安相。退役陸軍大将。南スラウェシ出身の政治家のうち、中央政界で活躍した最初の人物である。

10) Bachrudin Jusuf Habibie (1936-)。南スラウェシ州パレパレ出身。ブギス人。西ドイツ・アーヘン工大にて博士号を取得し、30 代にしてメッサーシュミット社の副社長を務めた。1978 年以来長らく科学技術担当国務大臣を歴任。98 年、スハルト退陣を受けインドネシア共和国第 3 代大統領に就任した。初代スカルノから現在のユドヨノに至るまで、6 代を数える大統領経験者のうち、ジャワ島出身者以外でその職にまで上りつめたのはハビビを置いて他にいない（ただし、母親はジャワ人である）。



図1 インドネシア地図

エリートの存在を背景に、ジャワに対する優越意識もあり、結果いまだに独立しようという動きすらまれに起こる。彼らはアンビバレントな感情を抱いているのである。

加えて、ブギス・マカッサルの民族性にも言及しておかねばなるまい。インドネシアは「多様性のなかの統一」を国是とし、大小合わせて 300 を超える民族集団が存在するといわれる世界有数の多民族国家であるが、その諸民族にまつわるステレオタイプもまた要を得ている。<sup>11)</sup> そのなかでブギス人、マカッサル人は「短気、気性が荒い、プライドが高い」といった民族性をもって知られる。マカッサルの友人曰く「ジャワの奴はおとなしすぎる、怒っていても怒っているように聞こえない。でもマカッサルの人間は逆で、怒ってなくても怒っているように聞こえる」とのことである。事実、筆者がフィールド調査でマカッサルに滞在中、男たちの乱闘シーンを目撃したのは一度や二度ではなかったし、伊藤 [1993a: 129] の行った調査によると、気性の激しさを反映してか南スラウェシ州における殺人事件の発生率は、他の地域を圧倒的に引き離してトップであるという。

そうした民族性を理解するためのキーワードとして「シリッ・ナ・パッチェ (*siri' na pacce*)」という言葉がある。これはブギス語、マカッサル語に共通の語彙であり、「シリッとパッチェ」を意味する。シリッは「恥」や「名誉」といった概念を表し、パッチェは他者の苦衷に共感する同朋意識を指す。なかでもシリッは重要で、仮に辱めを受けたなら相手に必ず報復せねばならない、そうして初めて尊厳は回復される。日本人における武士道のようなものだという。<sup>12)</sup> つまりブギス人、マカッサル人にとって、自らの誇りに関わる強烈な道徳心、規範がシリッであり、南スラウェシはその概念が今も色濃く残る世界である。そのため、たとえば PSM が試

11) ジャワ人は繊細で従順、ミナンカバウ人は口先上手で商売に長けている、等々。

12) *Kompas* 紙の記事 “*Bushido*” dan “*Siri*” Mengandung Sikap Patriot [*Kompas*, September 10, 2001] 参照。



写真 1 アンディ・マッタラッタ、PSM の選手にシリッをもつことを望む  
[Pedoman Rakyat, November 18, 1989]

合で不甲斐ない姿を晒したとき、地方紙の一面を「PSM よ、シリッをもて」といった見出しが飾ることも稀ではない（写真 1）。

## 2. インドネシアへのサッカーの伝播と発展（19 世紀末～20 世紀前）

### 2.1 近代サッカーの誕生<sup>13)</sup>

現在サッカーとして知られる競技のもとが完成したのは、他の多くの種目同様、19 世紀半ば、イギリスにおいてである。

19 世紀初めには、イギリス上流階級の子弟が通うパブリックスクールですでに現在のサッカーの原型は遊技として親しまれていたが、それは依然それぞれの校舎独自のルールにもとづいたものであり、互いのルールは異なっていたため、対外試合の開催は困難が伴った。この不便を解消すべく、ハーロウ、イートン、ウェストミンスターといったパブリックスクールの卒業生を中心とした 11 のチームの代表者がロンドンに集まり、統一ルールを採択、初のフットボール・アソシエーション (Football Association/FA) が設立された。1863 年のことである。近代スポーツとしてのサッカーはこのとき誕生したといつてよい。<sup>14)</sup>

その後 1874 年には、現在もイングランド・プレミアリーグに所属するアストン・ヴィラが、試合観戦のための入場料を観客から徴収している。つまり当時すでにサッカーが、プレーするのみならず、観るための娯楽としても確立されていたことになる。同時にその人気は上流階級

13) 本節のサッカー発祥に関する概史部分は、主に山本 [1998]、ヴァール [2002]、日本サッカー協会 [2002] を参照した。

14) サッカー soccer という呼称の由来は、このアソシエーション association という言葉が省略され訛ったものである。



から中流階級、労働者階級の人々の間にも広がりはじめた。そして、同じくパブリックスクールのフットボールから分岐したラグビーが長らく上流階級のスポーツとしてアマチュアの地位にとどまり続けたのとは対照的に、早くも 1880 年代にはプロ化が合法化され、リーグ戦が始まった。マンチェスター・ユナイテッド (1878-)、アーセナル (1886-) といった日本でも馴染みの深いチームを含め、現在プレミアに所属する全 20 チーム (2005-2006 年度シーズン) のうち実に 17 チームまでもが、この時期 1870 年代から 1890 年代にかけて設立されているのである。

同時に 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、サッカーは当時の強大な大英帝国の力を背景に、国内だけでなく、またたく間に世界へ広がることとなる。なおインドネシアの植民地宗主国であったオランダの最初のサッカークラブは、ハーレム・フットボールクラブ (Haarlemsche Football Club) という。1879 年、イギリスで教育を受けたピム・ミュリエル (Pim Mulier) なる 14 歳の青年によってもたらされた。

そして 1904 年、国際サッカー連盟 FIFA が設立された。この正式名称が今もってフランス語表記なのは、その設立がフランススポーツ連盟のロベール・ゲラン主導のもとで行われたためである。これは地続きのヨーロッパ大陸において、国境を越えたチーム間で試合が行われるようになり、国際試合の調整、統括がフランスによって進められたということ意味する。FIFA 設立時の加盟国はフランスの他にオランダ、ベルギー、デンマーク、スペイン、スウェーデン、スイスであった。イギリスは一国内にイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドという 4 つのサッカー協会をもち、またサッカー発祥の地であるという過剰な自負から、当初 FIFA に対して関心を示さなかった。1906 年に一旦は加盟するものの、その後二度にわたって脱退を繰り返した。最終的に復帰するのは第二次大戦後 1946 年のことである。そしてその頃にはすでにサッカーは世界で最も人気あるスポーツへと成長しており、FIFA は「数あるスポーツ組織のなかでも最大にして最も重要な組織」[グットマン 1997: 67] へと成長していたのだった。

## 2.2 インドネシアサッカーの発展<sup>15)</sup>

現在のインドネシアに相当する地域に、初めてサッカークラブが誕生したのは 1893 年、バタヴィア (現ジャカルタ) においてであった。正式名称をバタヴィア・クリケット&フットボールクラブ「ロート・ウィット」(Bataviasche Cricket en Football Club 'Rood-Wit') という。<sup>16)</sup> イギリスで FA が誕生して 30 年後、オランダにサッカーがもたらされて 14 年後のことだった。

15) 本節のインドネシアサッカーに関する概史部分は、主に PSSI [1980; 1990; 2000], Colombijn [2000], Palupi [2000] を参照した。

16) Rood-Wit は「紅・白」の意である。

20 世紀を迎える頃には各地にサッカーチームが作られ、それを束ねるアソシエーションも地域ごとに設立された。特にジャワでは早くから都市ごとにリーグが開催され、1914 年にはすでに都市間の対抗戦も行われた。参加したのはバタヴィア、バンドゥン、スラバヤ、そして開催地スマランの 4 都市である。この都市間対抗戦は以後恒例となり、1919 年には都市ごとのアソシエーションを束ねるべく、NIVB (Nederlandsch-Indische Voetbal Bond) が設立された。1920 年代をとおして、徐々に NIVB のメンバーにジャワの他の都市のアソシエーションも加わった。

やがて NIVB という依然オランダ人中心の組織を不満とするジャワの各地域のアソシエーションが脱退して、記念すべき 1930 年 4 月 19 日、「原住民」<sup>17)</sup> のみで構成される PSSI (インドネシアサッカー協会、当時の正式名称は Persatoean Sepakraga Seloeroeh Indonesia) が設立された。翌年 PSSI が主催するリーグ「コンペティシ・プルスリカタン (Kompetisi Perserikatan, 以下プルスリカタンと略す)」<sup>18)</sup> が始まった。初年度に参加したのはジャカルタ、バンドゥン、マゲラン、マディウン、スラバヤ、ジョグジャカルタ、スラカルタ (ソロ) の 7 都市であった。

その後 NIVB 内ではその方向性をめぐって再度対立が起こった。1935 年、バタヴィアのアソシエーションが排他的な NIVB を脱退し、NIVU (Nederlandsch-Indische Voetbal Unie) を独自に設立、他のいくつかのアソシエーションも NIVU に移っていく。これを境に NIVB は衰退していった。NIVU はジャワのみならず、外島のアソシエーションも受け入れた。たとえばスマトラ島パダンのアソシエーション (Voetbalbond Padang en Omstreken/VPO) は 1936 年に加入している。また NIVU は各地域のアソシエーションを傘下として積極的に加入させるのみならず、自身国際サッカー連盟 FIFA へ加入し、内外の連携を強めた。

その FIFA が主催する第 3 回ワールドカップが 1938 年、フランスで開催された。本大会出場のため予選参加をアジア地域から申し込んだのはインドネシア (当時はオランダ領東インドの名で登録) と日本だけだった。しかし 1937 年、日中戦争の勃発により日本は出場を棄権、NIVU を母体とするインドネシア代表は結局予選を戦わずして、アジア地域から初のワールドカップ出場を果たすこととなる。<sup>19)</sup>

1942 年 1 月、オランダ領東インドは、日本軍によるスラウェシ、カリマンタンなどへの侵

---

17) 植民地政庁は領内の住民を「ヨーロッパ人 (Europeanen)」、「外来東洋人 (Vreemde Oosterlingen; 中国人、インド人、アラブ人など)」、「原住民 (Inlanders)」に区分し、三者の間には法的な差異が設けられた。たとえば刑法に関しては「原住民」の方が「ヨーロッパ人」よりも刑罰が重かった [弘末 2005]。この「原住民」という範疇の植民地社会への浸透が、インドネシア・ナショナリズム勃興の大きな要因であるという [永積 1980; 吉田 2002]。

18) Kompetisi はコンペティション (競技会)、Perserikatan は結合の意を表す。

19) 本大会では一次予選で強豪ハンガリーに 0-6 の大敗を喫した。

攻を受ける。同年 3 月 1 日、日本軍はジャワ島へ上陸、3 月 9 日にオランダ領東インド王国軍は無条件降伏し、その 2 日前から日本軍政が始まった [加藤 1999: 194]。

インドネシアでの 3 年半におよぶ日本軍政期、日本軍はスポーツを、大衆動員や精神的鼓舞の手段として利用した。1943 年以降プルスリカタンは実施されていない。PSSI と NIVU はともに活動の停止を余儀なくされ、その存在は「タイイクカイ（体育會）」に取って代わられた。スポーツは、1920 年代半ば以降すでに日本国内で、思想善導、ナショナリズム昂揚の道具として政治的に利用されていた [坂上 1998]。インドネシアにおける日本軍のスポーツに対する扱いは、そうした国内政策の延長線上に位置づけるべき性格のものである [加藤 1999: 221]。日本軍占領下のジャワで発行されたグラビア誌『ジャワ・バル』<sup>20)</sup> には、スポーツについての記事がたびたび掲載されている。以下にタイイクカイ主催で行われたジャワ体育大會についての記事を抜粋して紹介する。

「ジャワ タイイク タイカイ」

ジャワ タイイク タイカイ ワ ジューガツ ニジューゴニチ カラ ミッカカン  
ジャカルタ ノ ガンビル ヒロバ デ オコナワレ マシタ  
ワカサ ト ネット チカラ ニ モエル センシュタチ ワ キョード ボーエイ  
ニ タチ アガル インドネシア ノ スガタ オ タクマシク ミセ マシタ

(『ジャワ・バル』1943 年 11 月 15 日号, p.20. [ジャワ新聞社 1992])

「第一回ジャワ體育鍊成大會を観る」

世界中で今日かくの如く盛大なる体育大會は、日本における明治神宮体育大會と、このジャワ全島體育鍊成大會とだけであろう。(中略) もとより我々の今日行ふこの種の大會は、ただ華やかな、かつてアメリカ人の享樂の対象であつたやうなものとは全然違つたものである。それは、直接戦争と結びついたものでなければならぬ。戦力の増強に明確に役立つものでなければならぬのである。さうであつてこそはじめてこの大戦争の行はれてゐるときに、この種体育大會の開かれる意義があるのである。(後略)

(『ジャワ・バル』1944 年 3 月 15 日号, p.6. [ジャワ新聞社 1992])

スポーツがこの時期インドネシアにおいて、政治的なプロパガンダとして利用されていたことが垣間見えよう。この性格は、1945 年 8 月の日本軍降伏後にも受け継がれることとなる。

20) 『ジャワ・バル』(Djawa Baroe, 新ジャワの意) は、ジャワ新聞社という官製新聞社から発行された雑誌である。1943 年 1 月から終戦までの 2 年 8 ヶ月間、毎月 1 日と 15 日に発行され、計 63 号を数えた。現在はその復刻版が龍溪書舎から出ている。

1947 年、日本のタイイックを継承した PORI (Persatuan Olahraga Republik Indonesia, インドネシアスポーツ連盟) が誕生する。次いで 1948 年 9 月、その PORI の主導で記念すべき第 1 回 PON (Pekan Olahraga Nasional, 国民体育大会) が開幕した。PON とは、オリンピックの形式を模した 4 年ごとに開催されるインドネシア国内のスポーツの祭典である。州対抗で行われ、第 1 回 大会に参加したのはジャワからの 13 州であった (現在はインドネシア全州から参加)。現在こそその相対的価値は低下している観は否めないものの、対オランダ独立戦争中ソロで行われた第 1 回大会は、サッカーを含む 13 種目 600 人のアスリートが参加、初代大統領スカルノが高らかに開会を宣言し、インドネシアの存在を内外に強烈に印象づけた [北村 1991: 168]。そしてインドネシアサッカーにとって第 1 回 PON は、1943 年以来、5 年ぶりのプルスリカタンをも兼ねる形となった。

翌 1949 年には PSSI と NIVU が融合し、新たに PSSI (Persatuan Sepakbola Seluruh Indonesia, インドネシアサッカー協会) が発足した。1951 年 PSSI は FIFA への加入が認められ、同年インドのニューデリーで開催された第 1 回アジア大会に参加した。この大会では結果を出せずに終わったものの、直後に行われたシンガポール戦で新生 PSSI として国際試合初の勝利を収める。

次いで 1953 年、インドネシア代表は「極東ツアー」と銘打たれた遠征において素晴らしい成績を残す。マニラではフィリピンのリーグ選抜に 8-0、学生選抜に 7-0、マニラインターボートに 5-0 といずれも圧倒的な強さで勝利、続いて当時アジア最強といわれた香港では香港コンビネーションに 3-1、香港選抜に 4-2、香港中華選抜に 5-0 とこれまた完勝を収めたのだった [Bethan 1990: 140]。

そして 1956 年 11 月 29 日、メルボルン・オリンピックという大舞台においてインドネシアはソ連と、前後半と延長、合わせて 120 分におよぶ死闘の末、0-0 で引き分けた。当時のソ連は押しも押されぬ世界のサッカー先進国である。<sup>21)</sup> そのメンバーのなかには後に GK (goalkeeper) として初のバロンドール<sup>22)</sup> を受賞することとなるスーパースター、レフ・ヤシ

---

21) 現在オリンピックにおけるサッカー種目には、3 名のオーバーエイジ枠を除いて 23 歳以下という出場資格が設けられているが、当時は年齢による制限はなかった。「アマチュアリズムの祭典」を標榜していたオリンピック出場資格は、プロでなくアマチュアであること、というただ一点であり、それがワールドカップとの相違であった。プロ選手の出場が禁止されていたため、南米やヨーロッパのサッカー強豪国はオリンピックの舞台で芳しい結果を残せていない。その例外が共産圏の国々である。国ぐるみでスポーツによる国威高揚を目指した東欧を中心とする共産圏の国々の選手たちは、名目的にはアマチュアながら、国家から給与を受け取り、競技に専念できる環境を与えられた実質上のプロ (「ステート・アマ」とよばれる) であった。ゆえにオリンピックにおいて圧倒的な強さを誇った。その最たる例が当時のソ連であることは言を待たない。事実、1956 年のオリンピックにおいてもソ連のサッカーは優勝を果たし、金メダルを獲得している。

22) Le ballon d'or (ヨーロッパ年間最優秀選手賞)。ヨーロッパで最も権威あるサッカー雑誌として知られるフランス・フットボール誌が主催し、ヨーロッパ各国記者の投票により選定。1956 年より開設。サッカー選手として最高の栄誉の 1 つとされる。

ン<sup>23)</sup>も含まれていた。ましてインドネシアにとって、まだ独立間もない 1950 年代半ばのことである。不安定な国内状況のなか、強豪国ソ連を無失点に抑え、負けることなく引き分けたというのは、サッカー界のみならずインドネシア全体を巻き込んだエポック・メイキングなできごとだった。今でもこの試合はインドネシアのサッカーファンの語り草となっている。

かくして、国際舞台におけるインドネシアサッカーの黄金時代が幕を開けた。

### 3. PSM の誕生とその黄金時代

#### 3.1 MVB から PSM へ (1915 年～1950 年)

マカッサルは古来より東南アジア海域の要衝である。西にジャワ海、東にバンダ海、北にマカッサル海峡、南にロンボク海峡を臨むインドネシア海路の中心であり、その地政学的重要性は航空時代となった今も変わらない。インドネシア東部地域における第一の都市として、人と物の流れの多くがマカッサルを経由する。

そのマカッサルに最初にサッカーがもたらされたのはいつのことなのだろうか。正確な年代は定かでないが、先に述べたとおりバタヴィアに最初にサッカークラブができたのが 1893 年であり、東ジャワのスラバヤに Victory という名のサッカークラブが作られたのが 1895 年という記録が残っているから [Palupi 2000: 85]、マカッサルにできたのもおそらく同時期であろう。インドネシア都市部におけるサッカーの最初期において、主要な役割を担ったのはほぼ例外なくオランダ人だった。

マカッサルにサッカーが伝わると、そのうちにマカッサルの諸サッカークラブを統括する組織の存在が必要となった。そうした背景のなか、PSM が設立されたのは、1915 年 11 月 2 日のことである。ただし当時の地元紙には何も言及されていない。<sup>24)</sup>ただ前章で見たように、他の地域同様、その設立および当初の運営は依然オランダの肝煎りによるものであったことは間違いなく、当時のクラブ名は PSM (Persatuan Sepakbola Makassar) ではなく、MVB (Makassar Voetbal Bond) というオランダ語表記であった。また、主なスタッフも皆オランダ人であった。<sup>25)</sup>

なお MVB にしろ PSM にしろ、直訳すれば「マカッサルサッカー協会」というニュアンスである。現在 PSM はプロ化され、1 つのプロクラブとしての側面がどうしても目立つが、もとは「協会 (アソシエーション)」であり、日本でいえばたとえば「京都市サッカー協会」に

23) Lev Yashin (1929–1990)。トレードマークである黒のユニフォームとその鉄壁の守備から、ゴールに巣を張る「黒蜘蛛」の異名を取り、史上最高の GK としての声価は高い。なお彼がバロンドールを受賞したのは 1963 年のこと。2000 年には FIFA が選ぶ「20 世紀ベストイレブン」にも選出された。

24) *Pemberita Makassar* (1903–1941) を参照した。

25) MVB 初代の代表の名は Hartwig、秘書 John Paulus、会計 Van Bommel という人物であったという記録が残されている (70 年代 PSM の会計を務めていたアバス・ニンリン氏所蔵の文書による)。

相当する。つまり MVB は 1 つのチームであると同時にマカッサルのサッカーを統括する組織として発足した。その性格はプロ化した現在にも受け継がれており、このことは地域社会との関係性を考察するうえで強調しておくべき事柄である。そしてその傘下にいくつかのチームが加盟し、MVB が主催する地域内のリーグに参加する。それら加盟チームのなかから有能な選手が選ばれ MVB という 1 つのチームとしても機能する。したがって、MVB が 1 つのチームとして機能するときそのメンバーは必然的に「マカッサル選抜」に他ならなかった。マカッサルに限らず、地域に根ざしたこのようなアソシエーションをもとにするチームがリーグを結成し、後にプロ化までしてしまうところがインドネシアサッカーの大きな特徴でもある。

さて MVB 設立時に傘下として加盟したチームは、Prosit, Hindia Serikat, Bintang Prijai, Makassarse Rode Vissen (MRV), OSVIA (Opleiding School voor Inlandsche Ambtenaren), Jong Makassar という 6 チームであり、第 1 回のリーグ優勝チームは Prosit であった。この 6 チームから MVB に参加していた当時のサッカー選手たちの出自がある程度把握できる。オランダ人中心の MVB が後にインドネシア人主導の PSM にそのまま引き継がれたという事実から鑑みて、こうしたサッカーの統括組織がマカッサルに他にも存在したとは考え難い。よって MVB に参加した選手層は、マカッサルにおけるサッカー層とほぼ一致していたと考えてよいだろう。Prosit, Makassarse Rode Vissen, Jong Makassar はそれぞれオランダ語で「乾杯」、「マカッサルの赤き魚」、「若きマカッサル」を意味する。OSVIA は「原住民」のための官吏養成学校である。5 年制中等教育機関であり、授業はオランダ語で行われた。残りの Bintang Prijai と Hindia Serikat はそれぞれインドネシア語で「プリヤイの星」,<sup>26)</sup>「連合インド」を意味する。これらの集団の構成員が、いずれもオランダ人の子弟もしくは「原住民」の上流階級層から成っていたことが推測できる。

1930 年代以降、MVB はオーストラリア、香港、中国といった外国のチームとたびたび交流を行っていた。<sup>27)</sup> 一方同じオランダ領東インド内のチームとの交流は比較的少なく、記録に残されているのは同じスラウェシ島内のチームや、地理的に近い東ジャワのスラバヤのチームなどに限られている。全国規模を標榜し、ジャワを中心に勢力を築きつつあった PSSI や NIVU と関わったという記録は、管見の限り残されていない。

1942 年に始まる日本軍占領期、マカッサルでのサッカーはどのような状況だったのだろう。依然 MVB は中央のサッカー界とは無縁であったが、その辿った経緯はジャワの他のアソシ

26) プリヤイとは、ジャワの社会層のうち伝統的な貴族層を示す呼称である。19 世紀末以来その多くがオランダ植民地の原住民行政官となっていく。20 世紀以降は、いち早く西欧式教育を身につけた新しい知識階級を総称するようになった。

27) 注 25) に同じくアバス・ニンリン氏所蔵の文書、および Anonymous [2000] による。ただしこうした「国際試合」を、誰がアレンジし、どのように行われていたのかということを示す資料は現時点でまだ手に入っていない。

エーションとほぼ同様であった。つまり、日本軍政の初期、MVB の活動は容認されていた。日本軍の「オランダ臭を徹底的に消し去ること」と「プリブミ社会との友好」という意向のもと [Anonymous 2000], MVB というオランダ語表記が PSM というインドネシア語表記に変えられたのもこの時期である。その後 1943 年、PSM は暫し活動停止を余儀なくされ、タイイクカイに取って代わられた。日本軍の撤退後、PSM 主催のリーグが再び開催されるのはようやく 1947 年のことであった。マカッサルの人々にとってサッカーが上流階級の娯楽のみならず、一般の人々へも浸透するのはこの頃である。

そして PSM にとって、その設立以来最も大きな転機となったのが 1950 年だった。この年 PSM は PSSI が主催する全国リーグ、プルスリカタンに初めて参加した。PSSI は 1930 年に発足し、翌 31 年にプルスリカタンは始まっている。一方 PSM (MVB) は 1915 年すでに設立されており、インドネシア東部地域のみならず、30~40 年代をとおしてオーストラリア、香港、中国といった外国の強豪チームと交流していた。にもかかわらず、自らの国の中心で行われるリーグに参加したのは、ようやく 1950 年を迎えてからのことだった。

インドネシアサッカー界ではしばしば PSSI の革新性が誇らしげに強調される。<sup>28)</sup> まず PSSI という名称そのものについて、NIVB や NIVU といった当時サッカー組織の常であったオランダ語表記とは異なり、PSSI (Persatoean Sepakraga Seloeroeh Indonesia) というインドネシア語表記を用いている。このこと自体画期的であった。なるほどこの主張は正しい。事実 1930 年時点では PSM も MVB というオランダ語名であった。そしてもう 1 つ、PSSI の I は Indonesia の I であるということ。つまりインドネシアという実体がいまだ存在していなかったこの時代、オランダ領東インドという代わりに「インドネシア」という語を確信的に使っており、これも画期的なことであった。

もちろんこれらの言説は一面では真実である。しかし同じ事象を PSM という地方の側から眺めたらどうなるか。また別の側面も浮かび上がってくる。PSSI、つまり 'Seloeroeh Indonesia (全インドネシア)' と高らかに銘打ちながら、PSM は 30~40 年代を通じて PSSI と関わりなく存在していた。形式的にはオランダ領東インドという同じ 1 つの領域でありながら、ジャワにとってマカッサルは依然「全インドネシア」という概念のなかに入っていない。マカッサルにとってのジャワもまた同様であっただろう。こうした認識のあり方が、当時の PSM の活動をとおして浮き彫りにされる。では PSM が PSSI に加盟した 1950 年とはどういう年か。

1945 年 8 月 17 日、日本軍降伏の 2 日後インドネシアは独立を宣言したが、それを認めようとしないう旧宗主国オランダとの間で、ジャワを中心に激しい闘争が続いた。結果 1949 年 8

---

28) Colombijn [2000: 183], PSSI [1980: 24] など。

月に始まるハーグ円卓協定により、同年 12 月 27 日、インドネシア連邦共和国に主権が委譲されることとなった。

一方その動きとは別に、東部インドネシアでは 1946 年、スラウェシ、マルク、ヌサ・トゥンガラを含む広大な領域に、マカッサルを首都とする NIT (Negara Indonesia Timur, 東インドネシア国) というオランダの傀儡政権が成立していた。この NIT をも取り込んだインドネシア共和国が名実ともに誕生するのが 1950 年 8 月のことである。1950 年インドネシアというインドネシア人による単一の国家が成立し、そこにスラウェシも組み込まれていく。同じその年に PSM は PSSI に参加する。つまり大局的な政治の動きと平行であることが分かる。

しかしインドネシア共和国の成立は、南スラウェシの一部の地域主義者たちにとってシリッの侵犯をも意味していた。その年以來、南スラウェシではカハル・ムザカル<sup>29)</sup> を首領とするゲリラ軍が中央政府に敵対し、独立を求めて激しい抗戦を続けた。その根底には、敬虔なイスラーム信仰に加え、反乱の宣言が「マジャパヒトを粉碎せよ！」<sup>30)</sup> であることから窺えるとおおり、強烈な反ジャワ感情があった。

1950 年 PSM は全国の統括組織である PSSI に参加する。一方で南スラウェシでは中央に敵対した反乱が起こる。インドネシア共和国の成立を背景に、PSM も南スラウェシも大きな転機を迎えることとなった。

このとき PSM は MVB の設立から数えてすでに 30 年を超える歴史を有していた。東部インドネシアを代表するチームとして、その名声は国内よりむしろ近隣の諸外国に知れわたっていたということはすでに述べた。プライドの高さと気性の激しさをもって知られるブギス人、マカッサル人である。インドネシアの中心であるジャワに、その力を見せつけるときがやってきた。

### 3.2 ファナティズム・ダエラ (1950 年～1960 年代半ば)

南スラウェシの社会不安は、反乱の首謀者カハルが殺されたとされる 1960 年代半ばまで長

---

29) Kahar Muzakkar (1919-1965). 南スラウェシ州ルウ出身。ブギス人。独立戦争期はジャワで独立軍の組織化に優れた才能を発揮し、連邦共和国の成立とともに国軍の中佐に任命された。しかしカハルは、武装解除をめぐって共和国軍に逮捕された彼の部下たち (南スラウェシで活動していた抗オランダゲリラ) の釈放と人事問題で、要求が容れられないことを不服として 1950 年、自ら中佐の階級章を外し下野した。南スラウェシで彼のシンパは今も多い。村の年寄りのみならず、たとえばマカッサルに住む若い人に聞いても、もしその時代に自分が生まれていたなら絶対にカハルを応援していたよ、という答えがしばしば返ってきた。公式の見解では、カハルは 65 年に銃殺され、反乱は終結したということになっているが、実はその墓は見つかっていない。そのため彼はまだ死んでいない、どこかで生きている、という信仰が根強くある (cf. [Tangke 2002])。インドネシア正史においてカハルは反逆者であるが、南スラウェシの多くの人々の間では、いまだ英雄なのである。

30) Majapahit (1293-1527). ジャワ最後にして最大の古代王国。以後のジャワの諸王朝の正統性の源をなす。14 世紀に迎えた最盛期には名宰相ガジャ・マダと強力な海軍を背景に、マレー半島からフィリピン南部に至る広大な地域を支配下に置いた。その存在は独立運動時においても現在の共和国においてもインドネシア栄光の代名詞である。



く続くこととなった。この 50 年代から 60 年代半ばにかけて、カハルの反乱により南スラウェシが荒れていた時代、PSM についていえば、その歴史のなかで最も輝いていた時代にそのまま当てはまる。表 2 はプルスリカタンにおける歴代の優勝および準優勝チームを示したものである。50 年代前半 PSM は依然プルスリカタンに参加したり、しなかったりを繰り返して結果を残していないが、それでも何名かの選手の実力はすでに全国的にも抜きん出ており、代表チームにも選出されていた。そして 1957 年から 1966 年までの 10 年間、6 度開催されたプルスリカタンのうち PSM は優勝 4 度、準優勝 2 度という圧倒的な強さを誇った。それを可能たらしめた理由は、大きく以下の 3 点があげられる。

1) インドネシアのサッカー史に残る偉大な選手たちが目白押しであったということ。そのなかにあつてさらに一際輝く選手がいた。名をラマン (Ramang. 1928-1987, ブギス人) という。

マカッサルの街の中心部に位置するラパンガン・カルボシ<sup>31)</sup> は、サッカーコートにして優に 6 面分の面積を有する。この広大な広場は誰もが認める街のシンボルの 1 つである。ここでは早朝から夜更けまで、人々がサッカーをはじめさまざまなスポーツに興じる姿を目にすることができる。また、そのなかのよく整備された 1 面は普段 PSM の練習場としても使われており、夕方になればその練習を觀ようと周りを人垣が取り囲む。この広場の入り口に面する最も目立つところに巨大な銅像がそびえ立つ。誰あろうラマンその人である (写真 2)。<sup>32)</sup>「ブラジルにはペレがいるだろ。ドイツにはベッケンバウアーがいるし、オランダにはクライフがいる。インドネシアではラマンなんだよ」。地元最大の日刊紙ファジャル (*Fajar*) でスポーツ記事を手掛けるベテラン記者、ルスラン氏の言である。彼は続けてこうも言う。「確かに今の PSM も強い。でもラマンのいた黄金時代に比べれば全然物足りない。PSM は、いや PSM だけでなくインドネシアサッカー界全体においても、ラマンに匹敵するカリスマはまだ現れていない」。<sup>33)</sup>

筆者はマカッサルで、今の PSM のことはあまり知らないしサッカーに興味もない、でもラマンのことは知っている、という人たちに少なからず遭遇した。フィールドワーク中、筆者が初対面の人に PSM のことを調べている旨を伝えと、たいていはラマンの話題が出た。筆者の一連の聞き取りのなかで、一般の人たちから、PSM 関係者、マスコミに至るまで、例外なく、誰もがラマンに対し最大級の賛辞を惜しまなかった。そして彼のプレーを身近で知る人ほ

31) Lapangan Karebosi. ラパンガンはインドネシア語で広場の意。カルボシはマカッサル語、うち kare はマカッサル人の王貴族階級成員に付く敬称 karaeng が訛ったもの、bosi は雨を意味する。つまり、雨を敬い、乾季に降雨を願った場所、というのが原意のようである。

32) この銅像は 1997 年、当時のウジュンパンダン (マカッサル) 市長マリック・B・マスの主導で建立された。

33) とともに、2003 年 4 月 24 日の聞き取りによる。

表 2 コンペティン・プルスリカタン歴代優勝・準優勝チーム一覧

年	優 勝	準 優 勝
1931	VIJ ジャカルタ	PSIM ジョグジャカルタ
1932	PSIM ジョグジャカルタ	VIJ ジャカルタ
1933	VIJ ジャカルタ	BIVB バンドウン
1934	VIB ジャカルタ	BIVB バンドウン
1935	Persis ソロ	PPVIM ジャカルタ
1936	Persis ソロ	Persib バンドウン
1937	Persib バンドウン	Persis ソロ
1938	VIB ジャカルタ	Persebaya スラバヤ
1939	Persis ソロ	PSIM ジョグジャカルタ
1940	Persis ソロ	PSIM ジョグジャカルタ
1941	Persis ソロ	Persebaya スラバヤ
1942	Persis ソロ	Persebaya スラバヤ
1943	Persis ソロ	PSIM ジョグジャカルタ
1948	Persis ソロ	PSIM ジョグジャカルタ
1950	Persebaya スラバヤ	Persib バンドウン
1951	Persebaya スラバヤ	Persija ジャカルタ
1952	Persebaya スラバヤ	Persija ジャカルタ
1954	Persija ジャカルタ	PSMS メダン
1957	PSM マカッサル	PSMS メダン
1959	PSM マカッサル	Persib バンドウン
1961	Persib バンドウン	PSM マカッサル
1964	Persija ジャカルタ	PSM マカッサル
1965	PSM マカッサル	Persebaya スラバヤ
1966	PSM マカッサル	Persib バンドウン
1967	PSMS メダン	Persebaya スラバヤ
1969	PSMS メダン	Persija ジャカルタ
1971	PSMS メダン	Persebaya スラバヤ
1973	Persija ジャカルタ	Persebaya スラバヤ
1975	Persija ジャカルタ・PSMS メダン (両チーム優勝)	
1977	Persija ジャカルタ	Persebaya スラバヤ
1978	Persebaya スラバヤ	PSMS メダン
1979	Persija ジャカルタ	PSMS メダン
1980	Persipura ジャヤプラ	PSMS メダン
1981	Persiraja バンダアチェ	Persipura ジャヤプラ
1983	PSMS メダン	Persib バンドウン
1985	PSMS メダン	Persib バンドウン
1986	Persib バンドウン	Perseman マノクワリ
1987	PSIS スマラン	Persebaya スラバヤ
1988	Persebaya スラバヤ	Persija ジャカルタ
1990	Persib バンドウン	Persebaya スラバヤ
1992	PSM ウジュンパンダン	PSMS メダン
1993	Persib バンドウン	PSM ウジュンパンダン

Joseph [1993: 19], The Rec. Sport. Soccer Statistics Foundation (ホームページ) などをもとに作成.



写真2 カルボンにそびえるラマンの銅像

どその賞賛の度合いが大きいという印象を受けた。「彼こそは天性の才能 (*bakat alam*) の持ち主。並はずれている (*luar biasa*), 真の天才 (*jenius*)…」こうした言葉を、筆者はマカッサルで何度聞いたか分からない。そしてこの評価は決して地元マカッサルだけにとどまるものではない。筆者は念のためにジャカルタで、ジャワ人の PSSI 役員の人々に対してもラマンについての質問を試みたが「そうだね、彼はひとつの伝説 (*legenda*) だからね」と、苦笑いしながらもラマンがインドネシア史上最高の選手であることを認めたものだった。2004 年 7 月には彼の業績を称え、ジャカルタの名門トリサクティ大学が、新しいスタジアムにラマンの名を冠することを決めた。

また彼はサッカーのプレーのみならず人間としても魅力に溢れる人だったようである。無類の愛煙家にして、試合前日でも徹夜でドミノを楽しんだ。そして仲間と談笑しながら、たとえば「今日は 3 ゴール決めてみせる」と冗談まじりに宣言すると、本当に約束どおり 3 ゴール決めたという。こうした「ラマン伝説」は尽きることがない (写真 3)。

ラマンは CF (center forward), つまりトップに陣取り得点を量産するストライカーである。ポジションがポジションだけに彼が一番目立ってしまうのだが、しかしこの時代の PSM はラマンだけではない。中央にラマン、右にヌル・サラム (Noor Salam), 左にスアルディ・アurlan (Suardi Arland). この 3 人の FW (forward) は「黄金のトリオ」と称された (写真 4). GK (goalkeeper) は M・サエラン (Maulwi Saelan). 彼も PSM のみならずインドネシア代表でも長らく正 GK を務めた選手で、インドネシア史上最高の GK とされている。1920 年代末から 30 年代にかけて、そろってマカッサルとその近郊で生を受けたこの 4 人はみな、インド



写真 3 ラマン, 元『インドネシアのペレ』[Kompas, November 4, 1970]



写真 4 1956 年, 黄金期にさしかかった PSM の面々

前列左からヌル, ラマン, スアルディの黄金トリオ. その隣が, 今なお健在で聞き取り調査に積極的に協力していただき, この写真も寄贈して下さったカシム氏.

ネシアサッカーのオールドファンなら誰もが知る名である。「あの頃の PSM の選手たちは皆『サッカー語 (bahasa bola)』を身につけていた. 別に何か口に出して言わなくても選手たちは互に通じ合っていた. 今のサッカーはモダンになったけど, 『サッカー語』はなくなってしまっている」. 現在 PSM でアシスタントコーチを務めるトニー・ホーは語った.<sup>34)</sup>

2) この時代 PSM を南スラウェシの軍部が強力に後押ししていたということ. なかでも重要な人物がアンディ・マッタラッタだった.<sup>35)</sup>

彼は 1950 年代, 既出の M・ユスフとともに南スラウェシで勢力を二分していた傑物であ

34) 2003 年 6 月 3 日の聞き取りによる.

る。その後ユスフは中央に進出してトップまで上りつめるが、マッタラッタはマカッサルにとどまり続けた。よって全国的な知名度こそユスフに譲るが、地元ではより崇拜の対象となっている。<sup>36)</sup>

彼は若かりし頃、スポーツ選手として名を馳せていた。水泳や体操や陸上、ボクシングまでこなすオールラウンドなアスリートだった。日本占領期のタイイクカイにおいても、優秀な成績を収めて日本軍に気に入られていたという。彼は早くから地域社会におけるスポーツの重要性を認識しており、1950年代初めからPSMをサポートし続けた。航空機での移動がまだ一般的でなかった当時、PSMの試合が遠隔地で行われるときは、軍用機の使用を許可し選手を送り届けた。スパイクやユニフォームなども軍部から支給されていた。またこの時期には、M・サエランなどPSMの選手をしながら軍部で働く者もいた。<sup>37)</sup>

1957年には第4回PON(国民体育大会)がマカッサルで開催された。当初中央からは治安の悪さを理由に、マカッサルでの開催は拒否され続けた。しかしマッタラッタは私財を投じ、2年の歳月を費やして豪華なスタジアム(スタディオ・マトアングイン)<sup>38)</sup>を完成させ、何とかマカッサル開催にこぎつけた。このスタジアムは半世紀近く経った今でもPSMのホームスタジアムである。

3)最後の理由は、次の言葉——筆者が行った聞き取りのなかで最も印象に残っているものの1つであるが——に集約されるものである。「おれたちの時代はファナティズム・ダエラ(*fanatisme daerah*, 愛郷のファナティシズム)の時代だ。今とは違う。PSMのために死ぬるなら幸せだと本気で思っていたよ」。50~60年代にMF(mid fielder)として活躍し、今もなお健在なカマルディン・カシム氏の言である。<sup>39)</sup>氏のこの強烈な言葉が、この時代を表現するのに最もふさわしい。

インドネシア諸民族のなかでブギス人、マカッサル人の他に勇猛な気質をもって知られる民族としてスマトラのバタック人があげられる。ブギス人、マカッサル人は、そのバタック人と

35) Andi Mattalatta (1920–2004)。マカッサル北方、南スラウェシのバル(Barru)王族直系の大富豪。ブギス人。退役陸軍少将。詳細な軌跡についてはMattalatta [2003] 参照。ちなみに実娘アンディ・メリエム・マッタラッタ(Andi Meriem Mattalatta)は全国的に著名な歌手である。

36) このあたりの20世紀南スラウェシ政治史についてはMagenda [1989]に詳しい。なおこのマゲンダ論文では2人が相容れないライバルとして描かれているが、実際のところ仲は良いという。筆者の聞き取り(2003年9月6日)においてマッタラッタは、ユスフがマカッサルに帰ってきたら今でもよく会っていると語っていた。ちなみにこの2人を含め、南スラウェシ社会の上層部には今もってアンディという名が付く人物が多いが、これはブギス社会における王貴族階級成員であることを示す称号である。

37) 筆者の聞き取りの限り、この時期以降でPSMの選手かつ軍人、という人物はいない。

38) Stadion Mattoanging(マトアングイン・スタジアム)。mattoangingはマカッサル語。インドネシア語のmata anginと同義で、(コンパスによる)方角の意(mataは目、anginは風が原意)。なお同じアングイン(風)でも、インドネシア語と違って語尾がangingと鼻濁音化するのがマカッサル語の特徴である。

39) 2003年7月5日の聞き取りによる。

の比較においてさえ、戦闘のとき「バタック人は勝敗を考えてから、おれたち（ブギス・マカッサル）は死ぬ為に」と豪語するほど激烈な民族性をもつとされる。<sup>40)</sup> この時代の PSM には、そうした言説剥き出しの姿がある。郷土に対する熱烈な想いと、それと表裏一体をなす相手チームへの激しい対抗心。当然相手チームの誰もが PSM との試合に恐れおののいていたという。

この時期、カハルは南スラウェシの独立を求めて中央に反旗を翻した。一方で PSM は PSSI に参入する。これら 2 つの事象はしかし、ファナティズム・ダエラという情動性において共通していたのである。

ところが、1950 年に反乱を開始したカハルは 65 年に銃殺され、反乱は終結した。

奇しくも同じ 1950 年に PSM デビューを果たしたラマンは、4 度目の優勝を果たした翌 67 年にユニフォームを脱いだ。ラマンとその仲間たちが築き上げた PSM の黄金時代も終焉を迎えたのだった。

#### 4. 新秩序のなかの PSM

##### 4.1 マカッサルからウジュンパンダンへ（1960 年代後半～1970 年代）

1960 年代半ば、南スラウェシも PSM も再び大きな転換期を迎えることとなった。

1965 年カハルは銃殺され、反乱は失敗に終わった。しかし、南スラウェシでは現在もカハルのシンパが根強くいることから分かります。反乱の終結は依然住民すべての平穏を意味するものではない。その後カハル討伐の中心でもあったスハルトが実権を握り「開発」と「安定」をスローガンとする新秩序時代に突入、南スラウェシは従来に増して中央に組み込まれていった。

1971 年、中央の意向でマカッサルという地名がウジュンパンダン（Ujung Pandang「岬の端にパンダン椰子が生えている」という意）に突如変えられたのは、その象徴的なできごとといえる。マカッサルという地名は民族的な意識を煽るから、というのが中央の言い分であったが、古くから交易の中心として名高く、この名に誇りをもっているマカッサルの人々にとって容易に受け入れられるはずがない。あるマカッサルの知り合い（50 歳代、男）は「ジャワの

---

40) ちなみにこのブギス・マカッサル社会においては男に求められる生き方が強烈過ぎるため、ついていけない男には男であることから下りることも許容されており、その受け皿がある。シンガポールのブギス通りは男娼街としてつとに有名であった。近親者がトランスヴェスタイト（女装者、いわゆるおかま）になってしまった場合、決して喜ばしいこととは見なされないが、社会のなかである程度許容された存在として認められているのも確かである [伊藤 1993b: 172]。各種儀礼において彼らが重要な役割を担うことも多い。筆者はフィールド滞在中、南スラウェシの農村部での結婚式に何度か出席する機会を得たが、そのなかで彼らは、食事の配膳から舞台での催し物まで、欠かせない存在として重宝されていた。また、ラパンガン・カルボシでは「おかまコンテスト」が開催され、活況を呈していた。こうした事情は、ブギス・マカッサル社会が、前イスラーム的な伝統的諸儀礼において宗教的両性具有者を必要としたことと関係があるという [伊藤 1993b: 173]。

やつらが外海からマカッサルを眺めて単純に『あ、岬に椰子がある』、だからウジュンパンダン。そんな名前受け入れられるか！」とその憤りを筆者にぶちまけたことがある。<sup>41)</sup> 多くのマカッサルの人々にとってこのできごとは屈辱以外の何ものでもなく、中央に対するストレスは熾ぶり続けた。<sup>42)</sup>

一方 PSM に関してはどうか。1966 年 PSM はブルスリカタンにて 4 度目の優勝を果たした。翌年ラマンは選手生活にピリオドを打ち、ラマン世代の他の名手たちも 60 年代後半から 70 年頃にかけてみな引退した。すると南スラウェシの反乱が中央によって鎮められたのに呼応するかのごとく、PSM も見事に弱体化していく。その前年まで 6 度のシーズン中優勝 4 度、準優勝 2 度を遂げたチームが、結局 1992 年まで 26 年もの間、優勝はおろか準優勝からも遠ざかった。

70 年代の PSM には、ラマンあるいは彼と同世代の名手たちに匹敵するような選手は現れなかった。この時期 PSM における重要な変化は表ではなく、裏側で起こった。

1971 年、パトンボというウジュンパンダン（マカッサル）市長が、PSM の代表者 (Ketua Umum) に就任した。<sup>43)</sup> 彼は 1965 年から 78 年まで実に 13 年の間ウジュンパンダン市長を務めた人物である。これはマカッサル史上最長であり、今なお市民から名市長としての誉れ高い。

一般に 70 年代のインドネシアは、スハルト政権のもと軍部の力がより強大になった時代とされている。にもかかわらず、なぜこの時代 PSM の実権は軍部から市へと移ったのか。

まずパトンボの強力なカリスマによるものであることは間違いないが、加えて彼の在任中、ウジュンパンダン市の主導でロット (Lotto) という宝クジを販売し、市の財政が目に見えて潤った。そこで一般の市民たちが、市長であるパトンボが PSM の代表になることを望んだことも一因であるという（結局このロット制度はイスラームの教えに反するとして、70 年代後半に廃止された）。また、パトンボ自身軍部の出身であり、アンディ・マッタラッタとも親交があった。いずれにせよこのタイミングで、パトンボが PSM の代表になるのが最も適切だった。かくして軍部から市への移譲はスムーズに行われたようである。市長が PSM の代表を兼ねるという慣習は現在も続いている。ここで何より重要なのは、市長が PSM の代表者になることで、PSM が名実ともにマカッサルの公的な存在に収まったことだ。

次いで 1973 年、PSM が名実ともにマカッサルのシンボルになったことに注目し、もう 1

---

41) 2003 年 4 月 15 日の聞き取りによる。

42) 結局 1999 年、南スラウェシ出身のハビビ大統領（当時）の決定により再びマカッサルという名前に戻るまで、28 年間この地はウジュンパンダンであった。

43) H. M. Daeng Patompo (1927-1999). 南スラウェシ州ポルマス出身。マカッサル人。地方軍管区司令官 (Kepala Administrasi Kodam) を経て 1965 年、マカッサル市長に就任した。

人の人物が PSM に大きく関わっていくことになる。企業家ユスフ・カラである。<sup>44)</sup>

彼が代表を務めるハジ・カラ・グループはいまや地元を代表する大財閥であり、彼自身大臣職を歴任の後、現在ゴルカルの党首かつインドネシア共和国の副大統領の地位にまで上りつめているが、73 年時点ではハジ・カラ・グループは地方の一商社に過ぎず、ユスフ・カラ自身も、父親の後を継いだばかりの青年実業家であった。彼の成功の理由は多々あるが、PSM がその一翼を担っていたことは間違いない。筆者の聞き取り調査において、それは本人自身が証言してくれたことでもある。<sup>45)</sup> 70 年代をとおしてユスフ・カラは PSM の実質的なオーナーだった。彼はそのメリットを最大限に活かし、目立った形で PSM を支援し、ことあるごとにそれをアピールすることで積極的に自社のイメージアップを図る。彼が PSM を支援していた時期をとおして、ハジ・カラ・グループは急成長を遂げた。

ユスフ・カラ以前、基本的にメインスポンサーは軍部であった。もちろん他からの支援もなかったわけではない。たとえば市井の小金持ちが自分のお気に入りの選手を個人的にサポートしたり、純粋に名誉のために PSM に資金や道具を寄付したりすることはあった。しかし、ユスフ・カラのように大々的に PSM をサポートすることで、自らの経済的利益と結びつけた例はない。

したがってこの時期の PSM の特質は、パトンボとユスフ・カラというマカッサルを代表する 2 人の人物が関わったということになる。この 2 人が関わることによって、必然的に PSM の性格も大きく変わった。一般の人々からの聞き取りによると、当時マカッサルの人々にとって PSM の試合は映画とならぶ最大級の娯楽になっていた。<sup>46)</sup> これほど影響力抜群の媒体もそうではなく、その利用価値は大きい。当時の地方紙には、PSM に絡んだパトンボ、ユスフ・カラの記事がたびたび出てくる。曰く「PSM の選手たちを邸宅に招待し、激励した」、「地方から招待された試合について行って観戦した」<sup>47)</sup> 等々。PSM が 70 年代パトンボとユスフ・カラ

---

44) Jusuf Kalla (1942-)、南スラウェシ州ワタンボネ出身。ブギス人。マカッサルの国立ハサヌディン大学経済学部を卒業後、父の興した小さな会社（ハジ・カラ貿易会社、現在のハジ・カラ・グループ）を継ぐ。70 年代以降トヨタ自動車の輸入販売業を手掛け、一躍地元のトップ企業となった。なお 2002 年 12 月 5 日、マカッサルで起こった爆弾テロにおいて、マクドナルドとともに狙われたのがハジ・カラ・グループのトヨタ車ショールームである。

45) 2003 年 7 月 30 日の聞き取りによる。

46) 他の娯楽やメディアに関していえば、この頃マカッサルでラジオはすでに売られていたが、それは依然真空管式の、大がかりで高価な代物だった。手軽なトランジスタ式のラジオが一般に広がるのは 70 年代半ば以降である。ましてテレビの普及はさらに先のことだった。国営テレビ放送 (TVRI) がマカッサルで放送を開始するのは、ジャカルタより 10 年遅れの 1972 年のことであるが [TVRI 1992]、当時テレビを所有していたのはほんの一部の富裕層に過ぎない。ちなみに、技術的な問題からサッカーの生放送が可能になるのはそれから 20 年後のことである。民放がマカッサルで放送を開始するのはそれよりさらに後のことであった (1993 年)。しかし、技術的な問題が解決されても放送権などの問題により、リガ・インドネシアの試合が放送されることは現在稀である。



という 2 人の人物との関わりを得て、政治的・経済的な存在としての性格を色濃く帯びはじめたのだった。

そして PSM がそのように利用されることは、実は選手たちにとっても悪い話ではなく、互いに利用し、利用されることで相乗的なメリットがあった。少々チームの成績が低迷していても、PSM の選手であるというだけで、食堂に行けばたいてい誰かしらが食事をおごってくれた、といった些細なことから、公務員や一流といわれる企業など、一般に羨ましがられるような就職先からの誘いが引く手あまただった、といったことまでさまざまである。<sup>48)</sup> ラマンたちが築きあげた過去の遺産と、新たに PSM が得た社会的なステータスとが相俟って、この時代の特徴が浮き彫りにされる。

つまりこの時期 PSM は、相手チームに対して強烈な敵愾心を燃やし、勝利を宿命づけられ、中央をはじめとする外部との関係性において特徴づけられるファナティズム・ダエラの時代から、むしろマカッサル社会内部において重要な意義を与えられる時代へと移行した。PSM がマカッサル社会のなかでのステータスとして確立され、固定化されたがゆえに、皮肉にも対外的には低迷を続けることとなった。すなわち選手たちは、PSM でプレーすること自体が第一義的な目的となり、そのサークルがマカッサル内部のみで完結するいわば「閉じられた」状態へととなった。その傾向は 1980 年を境により顕著となる。

#### 4.2 PSM とマカッサル・ウタマ（1980 年代～1990 年代半ば）

1970 年代をとおしてインドネシアサッカーは、国際舞台で低迷を続けていた。<sup>49)</sup> その状況を打開すべく 79 年、セミプロリーグ「コンペティシ・ガラタマ (Kompetisi Galatama, 以下ガラタマと略す)」<sup>50)</sup> が設立された。77 年ジャカルタ特別区知事を退任後、PSSI 代表に就任していたアリ・サディキン (Ali Sadikin) の決定によるものだった。

アマチュアリーグであるプルスリカタンに参加する条件は、PSM がそうであるように、あくまで地域に根ざしたアソシエーションのチームであることだった。一方新たに設立されたガラタマへの参加条件は、そのオーナーがスポンサーとなって、選手やスタッフに給料を払った

47) アマチュアリーグであるプルスリカタンが行われるのは 1 年のうちわずか 3 ヶ月ほどである。それと不定期に行われるカップ戦以外は、非公式な招待試合、親善試合の類が大半を占める。

48) 元選手たちからの聞き取りによる。

49) 本稿の趣旨からは逸れるので詳しく立ち入ることはできないが、インドネシアサッカーの国際的な地位は、1950 年代から 60 年代半ばまでのスカルノ期と 60 年代後半以降のスハルト期で鮮やかに分かれる。端的に言えばそれは、新生国家としてインドネシアの統一と団結を対外的に示すことが責務であり、かつその際におけるスポーツの有用性を熟知していたスカルノ期と、「開発」を第一の目標と掲げ、相対的にスポーツの対外的価値が減じたスハルト期との差であろうと筆者は見ている。これはスポーツとナショナリズムを考察するうえで格好の例といえる。

50) ガラタマ (Galatama) は Liga Sepakbola Utama の略。Liga はリーグ、Sepakbola はサッカー、Utama はトップ。つまりサッカーのトップリーグの意。

り職を提供したりして面倒を見ることのできるプライベートなチームであることである。79 年 3 月、ガラタマは 14 のチームを迎え華々しく開幕した。この流れを受け、最初のシーズンも終盤に近づいた 80 年 3 月、翌シーズンよりマカッサルからもガラタマに参加するチームを作るべくユスフ・カラが再び動いた。

南スラウェシからガラタマに参加するクラブができる。この 4 月に正式に承認される見込み。南スラウェシのスポーツの再興のため、若き企業家ユスフ・カラが立ち上がった。おそらくチーム名は「マカッサル・ウタマ」<sup>51)</sup> になるようだ。ユスフ・カラ曰く「選手に関して困難な問題はない。南スラウェシは昔からサッカー選手を生み出す土地として有名だった。南スラウェシの外から選手を獲得するつもりはない」。… (後略)

[*Pedoman Rakyat*, March 22, 1980]

80 年代のインドネシアサッカー界は、ブルスリカタン (アマチュア) とガラタマ (セミプロ) という 2 つの全国リーグが存在した時期であり、マカッサルについていえば PSM とマカッサル・ウタマという 2 つのチームが存在した時期なのである。

さて新たにチームを作るにあたってユスフ・カラは何をしたか。彼は PSM から身を引き、マカッサル・ウタマのオーナーとなった。同時に自分のお気に入りの選手やスタッフをそっくりそのまま PSM から引き抜いた。ガラタマの開幕はインドネシアサッカーの新たな時代の幕開けを意味していた。それまでアマチュアでしかなかったのが、サッカーに関わることで給料や職が保証されるようになる。誘われた選手やスタッフにとって魅力的に映らぬはずがない。

結局 PSM はマカッサル・ウタマに大量に人材を取られた。これが禍根となり、以来 2 チームが交わることは久しくなく、お互い意識的に避けているような状態だったという。そして多くの人材を失った PSM は 80 年代をとおしてさらに低迷を続けた。

しかし当初は順調だったガラタマであるが、80 年代半ば頃から問題が噴出しはじめた。まず、アマチュアと違って金が絡んでいるだけに八百長、審判買収などが日常的に行われるようになった。次いで 86 年にボルカスというサッカーくじがガラタマに導入されるにおよび、イスラームへの信仰と賭け好きの国民性という相容れない取り合わせを反映し、それはまたたく間に全国的な社会問題へと発展した。同時に八百長や審判買収はさらにエスカレートしてい

---

51) ここでまず印象的なのは「マカッサル・ウタマ (Makassar Utama)」という名称そのものについてであろう。このチーム名は「マカッサルのトップ」といった意味だが、先に触れたとおり 1980 年時点でこの地は正式にはウジュンパンダンであってマカッサルでない。しかし間違っても「ウジュンパンダン・ウタマ」などという名前にはならない。ここにも、設立者のみならず地域社会の、マカッサルという名に対する愛着、暗黙的な総意が見てとれる。

き、客足は次第に遠のいていくことになる。そしてガラタマから離れた観客は、歴史あるプルスリカタンに再び戻っていった。

ガラタマの選手はセミプロであり当然レベルは高い。しかし観客は少ない。多くて数千人レベルしか入らない。一方プルスリカタンは、レベルはガラタマより下、しかしprestigeはガラタマより高い。数万の観客が入ることも珍しくない。このような歪な状態が長続きするわけがなく、ガラタマは早々に行き詰まった。表3を見れば、特に80年代半ば以降、開催の時期といい参加チーム数といい、ガラタマがシーズンによっていかに不規則に運営されていたかが窺い知れる。結果、ニアク・ミトラ (Niac Mitra) やクラマ・ユダ (Krama Yudha) といったガラタマ優勝経験をもつ名門チームも含め、経営不振に陥ったチームは次々に解散へと追いやられた。

そしてマカッサル・ウタマもその例にもれず、結局1度もリーグ優勝を経験することなく、1990年に解散を余儀なくされた。折しも当時のウジュンパンダン市長、つまりPSMの代表でもあったスワヒョー (Suwahyo) は、現在までのところマカッサル史上唯一のジャワ人市長 (中ジャワのソロ出身) である。その彼が先導して、マカッサル・ウタマの選手たちを90年以降、次々とPSMに引き入れた。皮肉なことに、PSMがマカッサル・ウタマと最も関わりをもったのは、マカッサル・ウタマの設立時と解散時だった。

スワヒョーはすでに故人なので直接話を伺うことはできなかったが、聞くとところによると熱烈なサッカー好きであったという。それだけではなく、マカッサルのジャワ人市長として、PSMを積極的に支援すれば市民の支持につながるということを明確に認識していたはずだ。<sup>52)</sup>

表3 コンペティシ・ガラタマ記録

ビリオド	期 間	優 勝 チ ー ム	参加チーム数
I	1979.3.17-1980.5.6	Warna Agung (ジャカルタ)	14
II	1980.10.11-1982.3.13	Niac Mitra (スラバヤ)	18
III	1982.8.28-1983.5.1	Niac Mitra (スラバヤ)	15
IV	1983.11.30-1984.5.2	Yanita Utama (ボゴール)	18
V	1984.8.4-1984.11.29	Yanita Utama (ボゴール)	12
VI	1985.9.22-1985.12.24	Krama Yudha (ジャカルタ)	8
VII	1986.8.31-1986.11.16	Krama Yudha (ジャカルタ)	9
VIII	1987.10.3-1988.4.6	Niac Mitra (スラバヤ)	14
IV	1988.10.15-1989.4.1	Pelita Jaya (ジャカルタ)	18
X	1990.1.7-1990.8.8	Pelita Jaya (ジャカルタ)	18
XI	1990.11.11-1992.2.27	Arseto (ソロ)	20
XII	1992.9.10-1993.8.12	Arema (マラン)	17
XIII	1993.9.4-1994.7.8	Pelita Jaya (ジャカルタ)	17

PSSI 所蔵のドキュメントなどをもとに作成。

それは、当時の地方紙をひもとけば、写真 5 のような見出しが頻繁に見られることからよく分かる。

結果 1992 年 3 月、PSM はプスリカタンで 26 年ぶりの優勝を果たす。レギュラーメンバーの過半数がマカッサル・ウタマからの移籍組である。そのときのマカッサルの人々の熱狂ぶりは尋常ではなかった。優勝から 1 週間経った後の地方紙を見ても、まだファンの喜びの声や選手を称える特集記事が紙面を埋めているという具合なのである。それほどまでにプスリカタンのプレステージは強大だった。次いで翌シーズン、PSM は惜しくも優勝こそ逃すものの準優勝を手にし、2 年連続で好成績を残した。四半世紀におよんだ低迷期は終わったといつてよい。

さて 80 年代、所属するリーグの異なる、1 つの街を代表する 2 つのチームがあった。これをどう理解すればよいのか。試合結果はもちろん、練習風景すらも地元紙の一面を飾ってしまうような土地柄である。サッカーに関する記事だけでスポーツ欄の大部分が占められる日も少なくない。マカッサルの人々の間で、この 2 チームはそれぞれどう位置づけられていたのだろうか。

マカッサル・ウタマは、セミプロリーグであるガラタマに所属している。選手たちの異動は頻繁に行われ、その移籍先はジャワをはじめ全国に広がっている。もちろんそれらは逐一記事で報告されるが、そうした交流は当然あってよろしい、という暗黙の了解を行間から読み取る

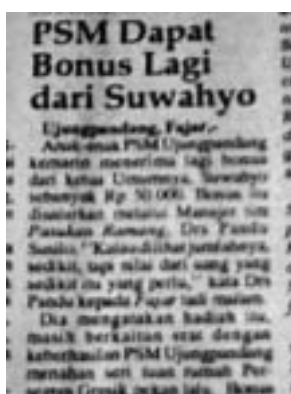


写真 5 PSM, スワヒョーからまたボーナス [Fajar, February 17, 1990]

52) パトンボとスワヒョーの間でウジュンパンダン市長を務めたアプスタム（任期 1978–1982）とジャンシー・ライブ（任期 1983–1988）は、PSM については「ある程度社会に任せようとした」（2003 年 9 月 13 日、ジャンシー・ライブからの聞き取りによる）という言葉のとおり、比較的放任路線を採り、少額の資金援助を行った程度で、パトンボやスワヒョーほど深くは関わらなかったようである。



写真6 PSMの2選手がニアクに「盗られた」[Fajar, April 30, 1990]  
ニアクとは、スラバヤに本拠を置くガラタマのチーム Niac Mitra のこと。

ことができる。

一方 PSM はどうか。たとえ市や企業の援助を受けているとしても、ステータスとしてはあくまでアマチュアであり、選手たちは例外なく地元で生まれ育った者によって構成されている。すでに半世紀以上の歴史を有する名門チームであるという自負もある。選手も観客もそれらに誇りを感じていた。当時の記事のなかで PSM の選手たちは ‘Pasukan Ramang’ (直訳すれば「ラマン部隊」) と表現され、PSM が生んだ過去の偉大な選手のイメージに重ね合わされる。

「もちろんマカッサル・ウタマも人気があった。しかしわざわざ試合を観に来るのは、本当にサッカーが趣味で、サッカーのことが好きな人たちだった。でも PSM の試合には、そんなの関係なく、誰もが応援に来ていた」という。<sup>53)</sup> 両チームは視覚的にも対照的で、PSM が真紅で無地のユニフォームだったのに対し、マカッサル・ウタマのそれには、真白の布地に胸には大きく ‘TOYOTA’ の文字が躍っていた。<sup>54)</sup> こんな状態だから、マカッサル・ウタマの場合と違って、ごくたまに PSM の選手が他のチームに移籍するともなればおおごとで、「PSM の選手が盗られた」という大仰な見出しが地方紙の紙面に躍るのである (写真 6)。80 年代 PSM は、マカッサル・ウタマという、対比されるが交わることのないライバルを得て、そのアイデンティティをより明確にした。

## 5. まとめ—インドネシアサッカーにおける地域の多様性と重層性

1915 年に産声をあげた MVB (PSM) はその創成期、オランダ領東インドにありながらその

53) 2003 年 9 月 23 日、当時のマカッサル・ウタマのスタッフからの聞き取りによる。

54) スポンサーのハジ・カラ・グループは、トヨタ自動車の輸入販売を手掛けていた (注 44) 参照)。

領域内よりむしろ周辺諸外国のクラブとの交流を頻繁に行っていた。ここに、同領域の中心であるジャワ、あるいは国境といった概念に対するマカッサルの人々の認識のあり方が見てとれる。50 年代以降の黄金期、地方反乱の続いた「ファナティズム・ダエラ」の時代、PSM は外部、特にジャワを中心とするインドネシア国家との関係性において特徴づけられる。打倒すべき明確な敵を得て、PSM の存在意義はより明瞭化かつ強化された。

次いで 60 年代半ばの反乱終結、スハルトの新秩序体制開始を経て、マカッサルの「ウジュンパンダン」時代、PSM は外部との関係性ではなく、むしろマカッサル社会内部において重要な政治的意義が付与された。ウジュンパンダン市長が PSM の代表に就任し、地元の野心的な企業家が積極的な援助を行うことで、PSM は地域社会におけるステータスとして確立され、その循環は内部のみに収斂していく。それが対外的な低迷の要因でもある。80 年以降、PSM はマカッサル・ウタマという同地域内の相容れないライバルを得て、その性格はより顕著となった。

以上の歴史から何がいえるか。マカッサル社会は PSM と密接に関わってきたと述べるだけでは不十分であろう。むしろ、そもそもはオランダによる植民地支配の過程で誕生した PSM のあり方そのものが、いまやそのときどきのマカッサル社会の、最も特質的な部分を表象し、可視化し、我々に明示してくれる。しかしその表れ方は決してパラレルもしくは一方的なものでなく、ともにパラメータとなりうる。その映りのグラデーションこそがまた、地域の特性でもある。地域社会とスポーツを考えるうえでの鍵は、おそらくここにある。たかが地方のクラブとはいえ、そこに関わっているのは選手やスタッフのみではない。さまざまな行為者や社会事象を総体的に捉え、なおかつ語る試みが必要とされるのである。

本稿では紙幅の都合上、主に PSM の通史を描くことにとどまった。そのため、より社会と密接なつながりをもった PSM の下部組織や熱狂的なサポーター集団についてなど、触れることのできなかったトピックは多い。これらは別稿にて取り上げたい。

さてプルスリカタンにおいて「リマ・ブサル」(Lima Besar, 5 強)と称えられた 5 つの専門クラブが存在した。すなわち Persija ジャカルタ、Persebaya スラバヤ、Persib バンドゥン、PSMS メダン、そして PSM マカッサルである。もう一度表 2 を参照されたい。プルスリカタンが全国規模に広がった 1950 年代以降、この 5 チームが優勝をほぼ寡占しているのは一目瞭然である。<sup>55)</sup> それぞれのホームタウンであるジャカルタ、スラバヤ、バンドゥン、メダン、マカッサルという 5 都市は、例外なくオランダが植民地期に支配の拠点としたジャワ、スマトラ、スラウェシの中心都市であり、それゆえにサッカーが早くから普及した地でもある。こ

---

55) 例外は、1980 年 Persipura ジャヤプラ、1981 年 Persiraja バンダアチエ、1987 年 PSIS スマランの 3 度のみである。準優勝ですらリマ・ブサル以外のチームが飾ったのは、1981 年 Persipura ジャヤプラと 1986 年 Perseman マノクワリの 2 度しかない。

の傾向がプルスリカタン時代を通じて変わることなく保たれていたということは、良くも悪くも、その間のインドネシアサッカーが、いかに地域に立脚したローカル色の濃い（裏を返せば、固定的で地域的流動性に欠ける）サッカーを展開していたかということの証左である。この際立った地域固有性がインドネシアサッカーの大きな特徴でもあるが、そうであるなら、PSM のみならず、他のクラブの歴史にも当該地域社会の特質が如実に表れているということもまた自明の論理であろう。したがって本稿が試みた事例研究が、他の地域についても行われ、蓄積されることにより、インドネシアサッカー史の全体像を描き出すことが必要となる。その成果は、スポーツを媒介としたインドネシアの地域的多様性・重層性を示す最も明らかな標となろう。これが今後の大きな課題の一である。

加えて、さらなる課題。本稿では 1990 年代半ば以降の 10 年について、敢えて触れていない。19 世紀末にインドネシアにサッカーが伝わって 1 世紀余り、インドネシアのサッカーを語るうえでおそらく今後も最大の分水嶺とされるのは 1994 年である。この年プルスリカタンとガラタマという 2 つのリーグは統合され、そして完全プロ化された。事態は PSM にとっても同様であった。プロ化以降、リーグ全体はもちろん、PSM においても人と金の流れは格段に増した。プロ化した PSM には、かつてなかったことだが、南スラウェシ外から他民族の選手や、南米やアフリカ生まれの外国人選手が加わり、年間予算は 10 倍以上に膨れ上がった。時を経ずして 1997 年には経済危機、次いで翌年には 32 年続いたスハルト政権の崩壊と、インドネシアは未曾有の混乱に陥り、サッカー界も大きな打撃を受けた。<sup>56)</sup> 混乱以降、民主化と地方分権が重要視されるポスト・スハルト期において、ローカルな地域単位としてのアイデンティティ熱は再燃しつつあり、PSM を含む各地のクラブはそのホームタウンのシンボルとしての位置づけをより強固にした。他方、プロ化された現在、クラブで活躍する選手たちは、かつてのように地元出身者のみに限定されることなく、多様な出自に彩られている。このように現在のインドネシアサッカーは、国内外の政治的・経済的諸力の「せめぎ合い」が最も端的に現れる場であり、その性格は今もって両義的な混沌の只中にある。よってプロ化以降のインドネシアサッカーを、それ以前と同列に並べて論じるのは尚早である。これもいずれ稿を改めて考察することになる。

## 附 記

本稿を Irreplaceable な二人の恩師、加藤剛先生と岡本正明先生に捧げます。

---

56) 1997-1998 年シーズンの 4 分の 3 がキャンセルされる非常事態となった。

## 引用文献

- Anonymous. 2000. *Mari Peduli PSM*. (PSM 所蔵のドキュメント).
- Bethan, Ignas. 1990. Persatuan Sepak Bola Seluruh Indonesia, Persatuan Sepak Raga Seluruh Indonesia. *Ensiklopedi Nasional Indonesia*. Vol. 13. Jakarta: Cipta Adi Pustaka, pp.139-141.
- Biro Humas Setwilda [sic] Sulawesi Selatan. 1999. *Welcome to South Sulawesi*. Makassar: PT. Andhikawati Saftiri.
- Colombijn, Freek. 2000. The Politics of Indonesian Football, *Archipel* 59: 171-200.
- Cribb, Robert. 1992. *Historical Dictionary of Indonesia*. London: The Scarecrow Press.
- エリアス, ノルベルト・エリック ダニング. 1995. 『スポーツと文明化：興奮の探求』大平 章訳, 法政大学出版局. (Elias, Norbert and Eric Dunning. 1986. *Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process*. Oxford: Basil Blackwell.)
- Gonggong, Anhar. 1982. *Abdul Qahhar Mudzakkar, Dari Patriot Hingga Pemberontak*. Jakarta: PT Gramedia.
- グットマン, アレン. 1997. 『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義』谷川 稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳, 昭和堂. (Guttmann, Allen. 1994. *Games and Empires: Modern Sports and Cultural Imperialism*. New York: Colombia University Press.)
- Harvey, Barbara S. 1985. South Sulawesi: Puppets and Patriots. In Audrey R. Kahin ed., *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution*. Hawaii: University of Hawaii Press, pp.207-235.
- 弘末雅士. 2005. 「オランダ領東インドにおける『原住民』意識の創出とアラブ系住民」島根県立大学第 5 回国際シンポジウム・レジュメ. <http://gsv.u-shimane.ac.jp/t-kishi/kaken/meeting/tw050320/hirosue.html> (2005 年 8 月 1 日).
- 伊藤 眞. 1993a. 「殺意の背景」宮崎恒二・山下晋司・伊藤 眞編『アジア読本 インドネシア』河出書房新社, 129-136.
- . 1993b. 「女になる病気」宮崎恒二・山下晋司・伊藤 眞編『アジア読本 インドネシア』河出書房新社, 171-177.
- ジャワ新聞社. 1992. 『ジャワ・バル 復刻版』全 5 巻. 東京：龍溪書舎.
- Joseph, Elyas, ed. 1993. *PSM Merebut Piala Presiden RI, Setelah 26 Tahun Menanti*. Makassar: Yayasan PSM.
- Kalla, M. Jusuf. 2003. *38 Tahun Bersama GOLKAR*. Jakarta: Golongan Karya.
- 加藤 剛. 1999. 「政治的意味空間の変容過程—植民地首都からナショナル・キャピタルへ」坪内良博編『〈総合的地域研究〉を求めて—東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会, 163-259.
- 北村正之. 1991. 「国民体育大会」石井米雄・土屋健治・加藤 剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎出版, 168.
- リーヴァー, ジャネット. 1996. 『サッカー狂の社会学』亀山佳明・西山けい子訳, 世界思想社. (Lever, Janet. 1983. *Soccer Madness*. Chicago: The University of Chicago Press.)
- Magenda, Burhan Djabier. 1989. A Divided Aristocracy in Power: South Sulawesi. In Magenda, Burhan Djabier ed., *The Surviving Aristocracy in Indonesia: Politics in Three Provinces of Outer Islands*. Vol. 2. Chap. 4. Michigan: UMI Dissertation Information Service, pp.545-826.
- Mangemba, H. D. 2002. *Takutlah Pada Orang Jujur (Mozaik Pemikiran)*. Makassar: Lembaga Penerbitan Universitas Hasanuddin.
- 松井和久. 2002a. 『スラウェシだより—地方から見た激動のインドネシア』アジア経済研究所.



- \_\_\_\_\_. 2002b. 「地方分権化に挑むスラウェシ」『インドネシア ニュースレター』40: 6-9, 日本インドネシア NGO ネットワーク.
- Mattalatta, Andi. 2003. *Meniti Siri' dan Harga Diri*. Jakarta: Khasanah Manusia Nusantara.
- Mattaliu, Abdurrazaq. 1997. *H.M. DG. Patompo, Biografi Perjuangan*. Makassar: Yayasan Pembangunan Indonesia.
- マトウラダ. 1978. 「イスラム国家建設をめざして一反乱軍の指揮官カハル・ムザカル」『真実のインドネシア』渋沢雅英・土屋健治訳, サイマル出版会.
- Media GO and PSSI, eds. 2001. *Buku Program Liga Bank Mandiri 2001*. Jakarta: PSSI.
- \_\_\_\_\_. 2002. *Buku Program Liga Bank Mandiri 2001*. Jakarta: PSSI.
- \_\_\_\_\_. 2003. *Buku Program Liga Bank Mandiri 2003*. Jakarta: PSSI.
- Mustafa, Moh.Yahya, A.Wanua Tangke and Anwar Nasyaruddin, eds. 2003. *Siri' dan Passe.'* Makassar: Pustaka Refleksi.
- ミニョン, パトリック. 2002. 『サッカーの情念—サポーターとフーリガン』堀田一陽訳, 社会評論社. (Mignon, Patrik. 1998. *La Passion Du Football*. Paris: Odile Jacob.)
- 永積 昭. 1980. 『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会.
- 日本サッカー協会編. 2002. 『サッカー百科大事典』大修館書店.
- 大川誠一. 1991. 「サッカー」石井米雄・土屋健治・加藤 剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎出版, 186.
- Palupi, Srie Agustina. 2000. Sepak Bola di Jawa 1920-1942, *Lembaran Sejarah* 2 (2): 78-102.
- \_\_\_\_\_. 2004. *Politik and Sepakbola*. Jogjakarta: Ombak.
- PSSI. 1980. *Kenang-kenangan P.S.S.I. 50th, 19 April 1930-19 April 1980*. Jakarta: PSSI.
- \_\_\_\_\_. 1990. *60 Tahun PSSI (1930-1990)*. Jakarta: PSSI.
- \_\_\_\_\_. 2000. *70 Tahun PSSI—Mengarungi Milenium Baru*. Jakarta: PSSI.
- 坂上康博. 1998. 『権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略』講談社.
- 白石 隆. 2000. 「ブギス人の海」『海の帝国』中央公論新社, 29-53.
- Sinansari ecip, S. 2002. *Hadji Kalla, Saudagar dari Mesjid*. Makassar: Cahaya Timur.
- Sukatanya, Yudhistira and Goenawan Monoharto, eds. 2000. *Makassar Doeloe Makassar Kini Makassar Nanti*. Makassar: Yayasan Losari Makassar.
- 多木浩二. 1995. 『スポーツを考える』筑摩書房.
- Tangke, A. Wanua. 2002. *Misteri Kabar Muzakkar Masih Hidup*. Makassar: Pustaka Refleksi.
- TVRI. 1992. *TVRI 30 Tahun*. Makassar: TVRI Stasiun Ujung Pandang.
- Volkman, T.A., Ian Caldwell and Eric Oey, eds. 1995. *Sulawesi Indonesia*. Singapore: Periplus.
- ヴァール, アルフレッド. 2002. 大住良之監修『サッカーの歴史』遠藤ゆかり訳, 創元社. (Wahl, Alfred. 1990. *La Balle Au Pied Histoire Du Football*. Paris: Gallimard.)
- 山本 浩. 1998. 『フットボールの文化史』筑摩書房.
- Yayasan Olahraga Sulsel. 1997. *Asal-usul Tanah dan Komplek Sarana Olahraga Mattoanging*. Makassar: Yayasan Olahraga Sulsel.
- 吉田 信. 2002. 「オランダ植民地統治と法の支配—統治法 109 条による『ヨーロッパ人』と『原住民』の創出」『東南アジア研究』40 (2): 115-140.

#### 定期刊行物

*Bola*

*Fajar*

*GO*

*Kompas*

*Pedoman Rakyat*

*Pemberita Makassar*

*Sportif*

### ウェブサイト

AFC アジアサッカー連盟, <http://www.asian-football.com> (2005 年 8 月 1 日)

FIFA 国際サッカー連盟, <http://www.fifa.com> (2005 年 8 月 1 日)

インドネシア専科, <http://www.jttk.zaq.ne.jp/bachw308> (2005 年 8 月 1 日)

International Football Results, [http://www.rdasilva.demon.co.uk/index\\_frame.html#asiangames](http://www.rdasilva.demon.co.uk/index_frame.html#asiangames) (2005 年 8 月 1 日)

JFA 日本サッカー協会, <http://www.jfa.or.jp> (2005 年 8 月 1 日)

Kota Makassar マカッサル市, <http://www.makassar.go.id> (2005 年 8 月 1 日)

Ligina リガ・インドネシア (非公式), <http://ligaindonesia.hypermart.net> (2005 年 8 月 1 日)

PSSI インドネシアサッカー協会 (非公式), <http://members.fortunecity.com/jftamaela/pssi.html> (2005 年 8 月 1 日)

The Rec. Sport. Soccer Statistics Foundation, <http://www.rsssf.com> (2005 年 8 月 1 日)